

寄生虫検査

動 向

平成7年度の学校保健法の改正後、ぎょう虫卵検査の対象学年は県下一部地域を除き、小学校1～3年生までとして定着している。今年度は前年度に比べ受検学校数は53校減(3.9%)、受検者数は5,666名減(1.9%)となった。ぎょう虫卵陽性者の割合は年々減少し、前年度と同様に1%を下回り、0.59%となった。同様にぎょう虫ゼロの学校の割合も増加しており、全体で56.3%となり、ぎょう虫卵検査の本来の目的を達成しつつある。当協会ではぎょう虫卵検査に限らず学校保健分野の検診、検査において従来の形を踏襲するだけでなく、学校現場の要望に答え、行政、医師会等と連携を保ち、社会の変化に対応できる検査態勢を今後も進めていく。

方 法

ぎょう虫検査

ぎょう虫は他の寄生虫と産卵の仕方が違う。人の体内では卵を産まず、産卵時期になると夜間肛門から這い出して肛門の周りに卵を産む。このため、当施設では肛門周囲に産卵されたぎょう虫卵を検出するウスイ式セロハンテープによる二日連続採卵法で検査を行っている。検査を受けるにあたっては朝起きてすぐに、検査紙を肛門周囲にあてる。排便後では肛門周囲がふき取られるために検出率が極端に低下するので注意が必要である。

精度管理

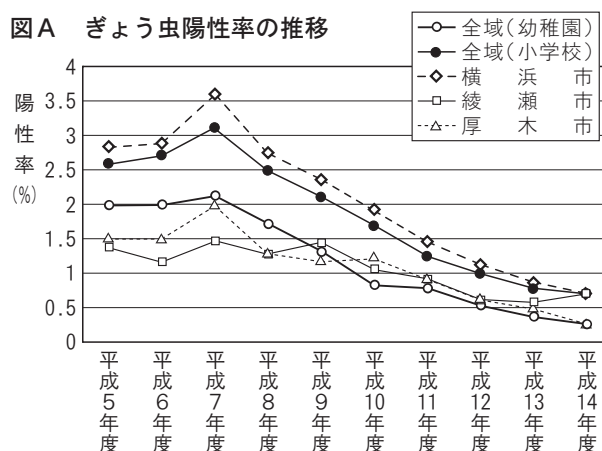
毎日の陽性率をチェックするとともに、顕微鏡検査による見落としを防ぐため一度検査したものを再検査し見落としがないかチェックしている。

結 果

過去10年間のぎょう虫陽性率年次推移を図に示した。幼稚園児の陽性率を(○)で、当施設で実施している全小学生の陽性率を(●)で示した。また年1回法で検査を実施してきた主要都市横浜(◇)、及び7年度まで年2回法を実施してきた綾瀬市(□)、厚木市(△)の陽性率年次推移(小学校)をそれぞれ示した。7年度に陽性率が大きく上昇している。これは検査の対象学年が小学校の全学年から陽性率の高い小学3年生ま

でと法改正されたためである。平成7年度からのぎょう虫陽性率は一定の割合で顕著に減少してきた。しかし小学校全体では平成11年度からその傾向が鈍化してきている。横浜市では平成12年度の陽性率が1.14%、13年度は0.89%と0.25%減少していたが、14年度は0.71%で0.18%の減少にとどまった。他方、早くから年2回法を実施してきた綾瀬市では平成12年度の0.59%から平成13年度は0.57%とほぼ横ばいで、14年度は逆に0.69%と13年度に比べて0.12%上昇した。同じく年2回法を実施していた厚木市は12年度0.62%から13年度0.49%で1.3%減少、14年度では0.29%と更に0.2%減少している。小学校全体で見たとき、平成7年度の陽性率3.1%から12年度1.0%に一気に減少したが14年度にかけては減少傾向は緩慢になつてきた。一方、幼稚園の陽性率は14年度0.31%まで減少し、更に減少する気配である。全体的に陽性率の減少傾向は14年度も続いているがその速度は鈍化しはじめた。とは言え7年前に3%あった陽性率が0.5%に近づいている。幼稚園にいたっては0.3%まで落ちた。今後、ぎょう虫陽性率の減少傾向がこのまま続いて、ぎょう虫症が終息に向かうのかどうか、あるいは減少傾向が緩慢になってある一定のところで減少傾向がとまるのか、今後のぎょう虫卵陽性率の動向が注目される。

図A りょう虫陽性率の推移



関係の集計表は153～154頁に掲載